

研究拠点形成事業
平成 28 年度 実施計画書
(平成 24～27 年度採択課題用)

B. アジア・アフリカ学術基盤形成型

1. 拠点機関

日本側拠点機関：	京都大学総合博物館
(中国) 拠点機関：	山東大学
(韓国) 拠点機関：	ソウル国立大学
(ベトナム) 拠点機関：	ベトナム科学技術院生態学生物資源研究所
(タイ) 拠点機関：	チュラロンコン大学
(マレーシア) 拠点機関：	マラヤ大学
(インドネシア) 拠点機関：	インドネシア科学院生物研究センター
(ミャンマー) 拠点機関：	ヤンゴン大学

2. 研究交流課題名

(和文)：アジア脊椎動物種多様性の研究者・標本・情報一体型ネットワーク拠点

(交流分野： 生物学)

(英文)：Asian Vertebrate Species Diversity Network Platform with Combining
 Researchers, Specimens and Information

(交流分野： Biology)

研究交流課題に係るホームページ：<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/acore/>

3. 採用期間

平成 26 年 4 月 1 日 ～ 平成 29 年 3 月 31 日

(3 年度目)

4. 実施体制

日本側実施組織

拠点機関：京都大学総合博物館

実施組織代表者 (所属部局・職・氏名)：京都大学総合博物館・館長・岩崎奈緒子

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：京都大学総合博物館・教授・本川雅治

協力機関：なし

事務組織：京都大学研究国際部研究推進課

相手国側実施組織 (拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

(1) 国名：

拠点機関：中国

拠点機関：(英文) Shandong University

(和文) 山東大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名) :

(英文) Marine College・Professor・LI Yuchun

協力機関 : (英文) Guangzhou University

(和文) 広州大学

協力機関 : (英文) Chengdu Institute of Biology, Chinese Academy of Sciences

(和文) 中国科学院成都生物研究所

(2) 国名 : 韓国

拠点機関 : (英文) Seoul National University

(和文) ソウル国立大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名) :

(英文) College of Veterinary Medicine・Professor・LEE Hang

(3) 国名 : ベトナム

拠点機関 : (英文) Institute of Ecology and Biological Resources,
Vietnam Academy of Science and Technology

(和文) ベトナム科学技術院生態学生物資源研究所

コーディネーター (所属部局・職・氏名) :

(英文) Department of Vertebrate Zoology・Researcher・NGUYEN Truong Son

協力機関 : (英文) Vietnam National Museum of Nature,
Vietnam Academy of Science and Technology

(和文) ベトナム科学技術院ベトナム国立自然博物館

(4) 国名 : タイ

拠点機関 : (英文) Chulalongkorn University

(和文) チュラロンコン大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名) :

(英文) Faculty of Science・Professor・PANHA Somsak

(5) 国名 : マレーシア

拠点機関 : (英文) University of Malaya

(和文) マラヤ大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名) :

(英文) Institute of Biological Sciences・Professor・HASHIM Rosli

(6) 国名 : インドネシア

拠点機関 : (英文) Research Center for Biology, Indonesian Institute of Sciences

(和文) インドネシア科学院生物研究センター

コーディネーター (所属部局・職・氏名) :

(英文) Research Center for Biology・Researcher・HAMIDY Amir

(7) 国名：ミャンマー

拠点機関：(英文) University of Yangon

(和文) ヤンゴン大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：

(英文) Department of Zoology・Professor・Thida Lay Thwe

5. 全期間を通じた研究交流目標

アジアは世界的にも生物多様性が高い一方で、文化や言語の多様性とも関連して、生物多様性に関する研究者・標本・情報の国境を越えた多国間共同体制や共有が十分に進んでこなかった。本研究課題では、脊椎動物種多様性に着目し、研究者・標本・情報の一体型ネットワーク拠点の形成を目指す。標本や情報（文献・写真・録音・映像・フィールドノート・研究データなど）は研究の基盤となるだけでなく、研究の証としても将来にわたって重要である。したがって、脊椎動物種多様性の研究基盤とは、研究者、標本、情報が一体となつてつながったものとなることが重要である。日本、韓国、中国、タイ、ベトナム、マレーシア、インドネシアの拠点機関となる7ヶ国と日本側メンバーとして参加するミャンマー、カンボジア、フィリピンの3ヶ国の東・東南アジアをほぼ網羅した計10ヶ国からのメンバーにより、交流期間を通じて、1. アジア多国間共同研究の実施と共通した種分類体系の構築、2. 原産国を基本にした標本収蔵と21世紀型標本ネットワークモデルの確立、3. アジア多言語で蓄積・生成される生物多様性情報の活用、4. 非言語による生物多様性データの収集・活用手法の開発、5. 国際的に活躍する生物多様性若手人材の育成、6. アジアの生物多様性と文化多様性の調和のとれた保全の模索、を本研究課題の目標として、アジア脊椎動物種多様性の研究者・標本・情報一体型ネットワーク拠点を形成する。

6. 前年度までの研究交流活動による目標達成状況

前年度までの研究交流活動を通じてアジア脊椎動物種多様性に関する京都大学総合博物館を拠点とする7ヶ国の拠点機関、協力機関、協力研究者との協力体制の多国間の枠組みでの構築に取り組み、新たにミャンマーを拠点国として追加申請するとともに、ラオス、カンボジア、バングラデシュとの協力関係構築に着手することができた。このことによってアジアの脊椎動物種多様性研究に関する着実な多国間の協力関係を構築した。交流期間を通じて目標にあげた6項目についても、着実に実現に向けた取り組みが進められており、とくに1については論文成果として公表、2～6については本事業を通じて開催した国際シンポジウムや国際セミナーで議論を展開することが出来、また若手研究者の交流を通じて実践的な取り組みとして進展が見られる。このように前2年度の研究交流活動による目標達成に向けた取り組みは着実に進展しており、最終年度の更なる発展が期待される。

7. 平成28年度研究交流目標

<研究協力体制の構築>

日本、中国、韓国、ベトナム、タイ、マレーシア、インドネシア、ミャンマーの拠点・協力機関およびその他の機関、ならびに日本側メンバーとして参加するフィリピン、ラオス、

カンボジア、バングラデシュの計12ヶ国の参加者が研究協力体制の構築を引き続いて進め、前年度までの拠点国との研究協力体制をより発展させ、東アジア+ASEANの多国間の研究協力体制の構築を目指す。とりわけ、昨年度までの協力関係をもとに今年度より新たに拠点国として追加したミャンマーについて、招へいや渡航を含めた共同研究を進めていく。京都大学が全学体制で進めているASEAN各国との共同体制の構築事業も合わせて、本事業の基礎はすでに構築されているので、それが有効に機能するように努める。実質的なメンバーの交流やネットワーク形成の場として、国際シンポジウム開催を含めた共同研究実施を10月にインドネシアで展開し、各国の主要メンバーおよび若手メンバーが集う。また、共同研究や国際セミナーの開催においても研究協力体制の強化をはかる。共同研究としては2つのテーマR-1とR-2を設定するが、いずれも相互に密接に関連した内容であるために、全ての参加メンバーが両方の共同研究に参加し、効果的に研究が進展することを目指す。なお、本研究課題に関連して、中国・中国国家自然科学基金委員会国際重大共同研究プロジェクト（中国側コーディネーターが研究代表者）、タイの国家事業である生物多様性COE事業（タイ側コーディネーターが事業責任者）との連携をはかっていく。京都大学の招へい研究者（客員教授）の制度により、ベトナムおよび中国の中堅メンバーをそれぞれ4ヶ月、7ヶ月間、京都大学に招へいし、共同研究や若手研究者の共同指導に関与してもらう予定である。また最終年度として本事業終了後の継続した研究協力体制を維持する方法についても多国間の枠組みで議論する。

<学術的観点>

アジアは世界的に見ても生物多様性が高いが、近年の急速な経済成長によって、陸上脊椎動物の多くが個体数を減少させ、絶滅に瀕していると考えられている。一方で、陸上脊椎動物では小型のものをはじめとして、現在までにその種分類が混乱したものが多く、フィールドワークによる資料収集とその形態・遺伝解析によって、種分類体系の改変や確立が必要である。アジアの陸上脊椎動物の分類の混乱の背景には、国境を越えて広域に分布する種が多い一方で、国境を越えた種分類体系の共通認識の確立や共同研究の実施が十分に行われていないために、国ごとに独自の分類体系が使われていること、また研究の基盤となる標本・言語情報・非言語データの収集や活用が不十分なことがあげられる。研究者、標本、情報について、アジアの陸上脊椎動物種多様性研究における多国間のネットワーク型研究基盤の構築を進めていくことによりすでに多くの種で分類体系の見直しが行われているが、広域分布種をはじめとして種分類体系のサンプルやデータが着実に蓄積されている、興味深い予備的知見が得られているものの学術成果としてさらに検討が必要な種も多くある。最終年度である本年度は、こうした種に特に注目し、さらに強化をはかる多国間協力体制を活用して研究を完成させるべく共同研究を展開する。本年度は前2年度に進めてきた共同研究の成果をもとに論文や学会発表などによる研究成果公表を活性化させ、インドネシアで10月に開催する国際シンポジウムにおいても各国メンバーの間で研究成果の共有をはかる。フィールドワークや標本調査といった従来の手法での共同研究R-1を進展させるとともに、写真、音声など標本に附随するデータや情報、多言語の枠組みでの既存文献の網羅的調査など、アジア脊椎動物種多様性のより正確な理解に向けた、新しい手法や研究枠組構築に関する共同研究R-2を引き続いて進める。特に広域分布種の理解においては調査や標本、種多様性情報が乏しいミャンマー、ベトナム、ラオスを重点的に新たな共同研究を進める。

<若手研究者育成>

本研究課題は大きな枠組みでは、生物多様性に関わる内容である。地球規模での生物多様性や環境変動に関わる問題は社会的にも注目されているが、その解決には、1. 高い専門性を有する研究者、そして2. 研究バックグラウンドをもち、社会との関わりを考慮しながら、関連課題に様々な形でかかわる人たちの存在が重要である。本研究課題ではこれら2種類の人材育成を目指しているが、いずれにおいても習得すべき能力は共通である。それは専門的な研究技能や能力の習得、研究者間あるいは一般社会とのコミュニケーション・交渉能力、アジアに生きる国際人としての英語とできれば第3言語の習得である。そして、そうした能力を活用して、あらゆる現場で限られた時間で物事を判断し、決断していくことのできるリーダーを育成することである。共同研究による実践的若手研究者育成を進めるため、タイ、マレーシア、ミャンマーなどから計4名の若手研究者を日本に2～3週間招へいし、実践的な共同研究を進めながら研究手法についての習得を目指す。同時に国際セミナーや日本国内学会大会などに参加し、発表スキルの向上と日本の関連研究者との研究交流を進める。前2年度の経験をもとに、複数の若手研究者を同時に招へいすることとし、招へいがもたらす効果、また日本の若手研究者への波及効果を最大限にすることを目指す。また、セミナーS-1としてインドネシアで開催する国際シンポジウムには各国の若手研究者を参加させ、口頭発表、座長などを担当してもらうとともに、優秀発表賞を設けて研究発表への意欲向上をはかる。前2年度の国際シンポジウムで若手研究者が主体的にネットワーク形成を始めていることから、本事業主導のネットワークに加えて若手研究者が主体的に進めるネットワークが有機的に機能するような手法についても検討を進める。なお、本事業ではすでに論文博士取得支援事業により2名が博士の学位を取得している。最終年度はインドネシア側メンバー1名が日本学術振興会の論博取得支援事業を実施中であり、本年度の学位取得を目指す。加えて、これまでに構築した研究協力体制をもとに、博士課程進学を目指した文部科学省国費留学生、日本学術振興会論文博士取得支援事業への新たな申請を進めるとともに、中国から日本学術振興会外国人特別研究員としてのポスドクの受け入れが予定されている。また、共同研究実施の中で日本やマレーシアなど相手国の学生に対する研究手法の取得を目指したトレーニング、中国、ベトナム、マレーシアなどにおける日本側メンバーの実質的な大学院生の研究指導や学位論文執筆指導への協力も行う。こうした他制度も十分に活用しながら、最終年度としての若手研究者の育成の発展を目指す。

<その他（社会貢献や独自の目的等）>

本研究課題が取り組む生物多様性は社会的な関心が高い分野である。拠点機関である京都大学総合博物館の社会連携活動とリンクさせながら、研究課題の成果を社会に積極的に発信していく取り組みも進める。平成29年度に京都大学総合博物館で本事業と関連する企画展の開催を予定しており、本年度はその準備を進める。また、京都大学総合博物館が独自に進めているアジア各国の研究型博物館との協力体制・ネットワーク構築とも密接にリンクさせ、本研究課題がより大きな成果をあげることを目指す。

8. 平成28年度研究交流計画状況

8-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成26年度	研究終了年度	平成28年度
研究課題名	(和文) フィールドワークと標本調査によるアジア脊椎動物種多様性研究 (英文) Asian Vertebrate Species Diversity Research based on Fieldworks and Specimen Survey				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 京都大学総合博物館 教授 本川雅治 (英文) MOTOKAWA Masaharu・ The Kyoto University Museum, Kyoto University・Professor				
相手国側代表 者 氏名・所属・ 職	(英文) 中国 LI Yuchun Shandong University, Marine College・Professor 韓国 LEE Hang Seoul National University, College of Veterinary Medicine・Professor ベトナム NGUYEN Truong Son Institute of Ecology and Biological Resources VAST, Department of Vertebrate Zoology・Researcher タイ PANHA Somsak Chulalongkorn University, Faculty of Science・Professor マレーシア HASHIM Rosli University of Malaya, Institute of Biological Sciences・Professor インドネシア HAMIDY Amir Research Center for Biology, Indonesian Institute of Sciences・ Researcher ミャンマー Thida Lay Thwe University of Yangon, University of Yangon・Professor				
28年度の 研究交流活動 計画	平成28年度はこれまでに進めてきた共同研究を通じて新たに資料取得が必要な国での現地調査を進めるとともに、多国間の枠組みでのデータ解析や論文執筆を行う。本事業経費では日本側メンバーがマレーシアおよびベトナムなどでフィールドワークと標本調査に基づく共同研究を計画している。その他、別途経費でもミャンマーやラオスをはじめとする地域で相手国との調査を予定しており、本研究課題との連携をはかる。また、共同研究と若手研究者育成のために、タイ、マレーシア、ミャンマーなどから計4名の若手研究者を京都大学に2～3週間京都大学に招へいし、共同研究、フィールドワーク、国際セミナー(セミナー2として実施)、国内学会参加による日本研究者との学術交流などを組み合わせた活動を行う。招へいは2名ずつで期間を重複させて行うことにより、相手国、日本側、および本事業全体における実施効果を高める。また、インドネシアで10月に開催する国際シンポジウムの時期にあわせて、若手メンバーを中心にした各国の選抜メンバーによる共				

	<p>同研究をインドネシアで実施し、研究成果としての充実をはかるとともに、継続した若手研究者の育成と国や世代を超えた研究者ネットワーク構築をすすめることにより、共同研究への成果につなげる。データ解析や論文執筆については多国間の枠組みで進める。若手研究者への指導も含めた論文作成を対面による議論に加えて、メール、スカイプなどを通じて進めていく。</p>
<p>28年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果</p>	<p>広域分布種をはじめとして、アジア脊椎動物種多様性の実態解明の進展が期待される。特に生物多様性理解において地理的に重要な位置にありながら調査がきわめて不十分であったミャンマーやラオスでの調査によりアジア全体の種多様性理解や種分類体系の改変に大きく寄与することが予想される。これまでの各国との共同研究ですでに多くの標本やデータが蓄積されている。それらを多国間の枠組みで見直し、種分類体系の改変が行われ、最終年度としてこれまでの研究成果をとりまとめながら論文出版も加速することが期待される。同時に本事業終了後の新たな共同研究の具体的なテーマを見だし、継続的な多国間共同研究を進める方策の具体的な進め方についても明確にできることが期待される。研究は、進捗状況にあわせて臨機応変に計画変更を行うことで、多国間の枠組みでの研究上のメリットが最大化することを目指したい。これまでのフィールドワークをもとにした共同研究実施を通じて生物多様性と文化多様性の双方の関連についても中国、ベトナム、ミャンマーなどの拠点国において理解が大きく進展している。最終年度の研究交流活動では、そうした生物多様性と文化多様性の調和した保全につながる方策についての議論がアジアの研究者によって共有されることが期待される。</p>

平成24～27年度採択課題

整理番号	R-2	研究開始年度	平成26年度	研究終了年度	平成28年度
研究課題名	<p>(和文) アジア多国間研究ネットワークに基づく標本・情報の新しい活用 (英文) Development of New Use of Specimens and Information based on Asian Multilateral Research Network</p>				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	<p>(和文) 京都大学総合博物館 教授 本川雅治 (英文) MOTOKAWA Masaharu・ The Kyoto University Museum, Kyoto University・Professor</p>				
相手国側代表 者 氏名・所属・ 職	<p>(英文) 中国 LI Yuchun Shandong University, Marine College・Professor 韓国 LEE Hang Seoul National University, College of Veterinary Medicine・Professor ベトナム NGUYEN Truong Son Institute of Ecology and Biological Resources VAST, Department of Vertebrate Zoology・Researcher タイ PANHA Somsak Chulalongkorn University, Faculty of Science・Professor マレーシア HASHIM Rosli University of Malaya, Institute of Biological Sciences・Professor インドネシア HAMIDY Amir Research Center for Biology, Indonesian Institute of Sciences・ Researcher ミャンマー Thida Lay Thwe University of Yangon, University of Yangon・Professor</p>				
28年度の 研究交流活動 計画	<p>本共同研究は共同研究 R-1 と同様に全てのメンバーが参加して行う。フィールドワークや標本調査による従来の種多様性研究にくわえて、写真、音声などの資料や情報を有効に活用し、フィールドワークや標本を適切にリンクしながら研究成果に結びつけていくための手法開発を継続して展開する。前年度までの研究活動により、標本と情報についてその生成過程に着目しながら相違点や特色を明らかにし、情報については自然界から取得されたものと、標本などから二次的に取得されたものと大きく異なるものが含まれていることが明らかになった。今年度はそれをもとに、標本や資料の概念について「証拠」や「参照」といった概念に着目し、より詳細に統合的理解を目指すとともに、具体的な活用手法について検討する。共同研究 R-2 と密接に連携させ、研究者の渡航や招へい、国際シンポジウムの中で、多国間の研究者により、それぞれがもつ標本や資料を紹介しながら、実践的な共同研究を展開する。</p>				

<p>28年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果</p>	<p>拠点機関である京都大学総合博物館が中心になる本事業の活動により、アジア脊椎動物の標本と情報の新しい活用手法を見だし、それにより写真、音声、映像などの研究に伴う研究資源アーカイブの保存と研究利用の重要性について認識を共有できることが期待される。これまでは形状に基づいて情報が分類されることが多く行われていたが、それに加えて生成過程に着目した保存ポリシーに関する議論や活用手法を見いだすことが期待される。また、それをもとに資料や情報の将来にわたる保管や活用についての基盤形成についての議論が進展し、アジア多国間の枠組みで脊椎動物種多様性に関わる標本や資料利用がはかられることが期待される。</p>
--	---

8-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「第6回アジア脊椎動物種多様性国際シンポジウム」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “6th International Symposium on Asian Vertebrate Species Diversity“
開催期間	平成28年10月 日 ~ 平成28年10月 日 (3日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) インドネシア、ボゴール市、ボゴール動物学博物館
	(英文) Indonesia, Bogor, Bogor Zoological Museum
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 本川雅治・総合博物館・教授
	(英文) MOTOKAWA Masaharu, The Kyoto University Museum, Kyoto University, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) HAMIDY Amir Research Center for Biology, Indonesian Institute of Sciences・Researcher

参加者数

派遣先 派遣	セミナー開催国 (インドネシア)	
	A.	B.
日本 〈人／人日〉	A.	10/ 30
	B.	0
中国 〈人／人日〉	A.	3/ 9
	B.	0
韓国 〈人／人日〉	A.	2/ 6
	B.	0
ベトナム 〈人／人日〉	A.	3/ 9
	B.	0
タイ 〈人／人日〉	A.	3/ 9
	B.	0
マレーシア 〈人／人日〉	A.	3/ 9
	B.	0
インドネシア 〈人／人日〉	A.	5/ 15
	B.	40
ミャンマー 〈人／人日〉	A.	3/ 9
	B.	0
合計 〈人／人日〉	A.	32/ 96
	B.	40

- A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)
 B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>本事業の各国メンバーが集い、事業計画や進捗状況を共有するとともに、アジアにおける脊椎動物の種多様性研究の現状について研究発表を通じた学術交流を行う。本シンポジウムはインドネシアで共同研究 R1 および R2 を行う一環として実施し、メンバーのみでなく、アジアからの関連研究者の参加と発表の場を設ける。研究事業経費では、若手研究者の参加に配慮するとともに、口頭発表は出来るだけ若手研究者のために確保する。また、若手研究者の優秀発表賞も設定し、優秀な発表を奨励する。アジアにおける脊椎動物、とりわけ哺乳類、爬虫類、両生類の種多様性について、活発な議論と研究交流・ネットワーク構築を展開することを目的とする。最終年度であることから、今後のアジア脊椎動物種多様性研究のネットワークやプラットフォームの継続性についてもメンバーで議論する。</p>	
<p>期待される成果</p>	<p>アジア広域における脊椎動物の種多様性の現状と最新の研究知見について、参加メンバーが共有し、本事業による共同研究、ネットワーク構築を効果的に進めるための有効な議論が期待される。若手研究者を単に指導の対象にとらえるのではなく、シンポジウムでも重要な役割を担いながら、議論の主役になるべきとの意見交換がなされたが、本シンポジウムがその実践の場となることが期待される。また、フィールドワーク、標本や遺伝子資源についての、各国の法令などについても具体的な議論や情報交換が進み、脊椎動物の種多様性理解へとつながることが期待される。また、標本や資料概念についても議論を行い、継続的かつグローバルな標本学術研究基盤の構築に向けた議論が進展することが期待される。</p>	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>日本側、インドネシア側実施責任者を Co-chair とする拠点国メンバーによる実行委員会、実施国であるインドネシアメンバーを主とした事務局を構成する。</p>	
<p>開催経費 分担内容</p>	<p>日本側</p>	<p>内容 講演要旨集印刷費 150,000 円 旅費 3,000,000 円は同時に実施する共同研究として支出する。</p>
	<p>インドネシア側</p>	<p>内容 会場費</p>

整理番号	S-2
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「第5回アジア脊椎動物種多様性研究セミナー」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “5th Seminar on Asian Vertebrate Species Diversity Research “
開催期間	平成28年9月 日 (1日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) 日本 京都市 京都大学
	(英文) Japan, Kyoto, Kyoto University
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 本川雅治・総合博物館・教授
	(英文) MOTOKAWA Masaharu, The Kyoto University Museum, Kyoto University, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) なし

参加者数

派遣先 派遣	セミナー開催国 (日本)	
	A.	B.
日本 <人/人日>	10/ 10	0
中国 <人/人日>	0/ 0	0
韓国 <人/人日>	0/ 0	0
ベトナム <人/人日>	0/ 0	0
タイ <人/人日>	1/ 1	0
マレーシア <人/人日>	1/ 1	0
インドネシア <人/人日>	0/ 0	0
ミャンマー <人/人日>	1/ 1	0
合計 <人/人日>	13/ 13	0

- A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)
 B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

セミナー開催の目的	本研究課題の共同研究実施に伴い、タイ、マレーシア、ミャンマーから若手研究者が来日するのにあわせ、日本を含めた若手研究者の研究交流を推進するために、最新の研究成果の発表とそれに基づく議論、さらにアジア脊椎動物種多様性研究の発展に向けた現状分析と今後の多国間共同研究の発展を目指した討論を目指す。	
期待される成果	拠点機関である京都大学総合博物館において、研究や標本に関する若手研究者が集い、セミナーを行うことによる若手研究者の研究力向上や多国間ネットワークの強化が期待され、新たな多国間共同研究の具体的なテーマが見いだされることが期待される。	
セミナーの運営組織	実施責任者：京都大学総合博物館・教授・本川雅治	
開催経費 分担内容	日本側	内容 なし

8-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

平成28年度は実施しない。

8-4 中間評価の指摘事項等を踏まえた対応

該当無し

9. 平成28年度研究交流計画総人数・人日数

9-1 相手国との交流計画

派遣先 派遣元	日本 〈人/人日〉	中国 〈人/人日〉	韓国 〈人/人日〉	ベトナム 〈人/人日〉	タイ 〈人/人日〉	マレーシア 〈人/人日〉	インドネシア 〈人/人日〉	ミャンマー 〈人/人日〉	合計 〈人/人日〉
日本 〈人/人日〉	()	()	()	2/14 ()	()	2/14 ()	10/50 ()	()	14/78 (0/0)
中国 〈人/人日〉	(1/212)	()	()	()	()	()	3/15 ()	()	3/15 (1/212)
韓国 〈人/人日〉	()	()	()	()	()	()	2/10 ()	()	2/10 (0/0)
ベトナム 〈人/人日〉	1/14 (1/122)	()	()	()	()	()	3/15 ()	()	4/29 (1/122)
タイ 〈人/人日〉	1/14 ()	()	()	()	()	()	3/15 ()	()	4/29 (0/0)
マレーシア 〈人/人日〉	1/14 ()	()	()	()	()	()	3/15 ()	()	4/29 (0/0)
インドネシア 〈人/人日〉	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
ミャンマー 〈人/人日〉	1/14 (1/34)	()	()	()	()	()	3/15 ()	()	4/29 (1/34)
合計 〈人/人日〉	4/56 (3/368)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	2/14 (0/0)	0/0 (0/0)	2/14 (0/0)	27/135 (0/0)	0/0 (0/0)	35/219 (3/368)

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流する人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

9-2 国内での交流計画

0/0 〈人/人日〉

10. 平成28年度経費使用見込み額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	1,000,000	国内旅費、外国旅費の合計は、研究交流経費の50%以上であること。
	外国旅費	4,500,000	
	謝金	0	
	備品・消耗品購入費	50,000	
	その他の経費	150,000	
	不課税取引・非課税取引に係る消費税	300,000	
	計	6,000,000	研究交流経費配分額以内であること。
業務委託手数料		600,000	研究交流経費の10%を上限とし、必要な額であること。また、消費税額は内額とする。
合計		6,600,000	